

日本通訳翻訳学会 第 10 回年次大会基調講演

通詞と「対訳」辞書—堀達之助をめぐって

堀 孝彦

(名古屋学院大学名誉教授)

はじめに

ご紹介いただきました堀孝彦です。このたび日本通訳翻訳学会から、その第 10 回年次大会にお招きいただき、大変光栄に存じております。ただ、先程のご紹介にありましたように、私は倫理学の専攻で思想史分野を歩き、比較的最近、日本英学史に越境してきた者ですので、タイトルのような内容をお話できるか、心もとない状態にあります。さらに、貴学会についてほとんど無知な私が、プログラムにある「基調」講演など語れる筈もありません。それらの点、ご寛恕いただきたく存じます。

今日、とくに私たち日本の言語環境には憂慮すべきことが尽きません。かつては「言霊」という信仰があり、ことばには霊の力が宿っていて、その言葉を発すればその通りになると信じられていたことがあります。ところが今は、どうでしょう。「優しい」とか「美しい」とか云われても、「環境に優しい」となれば、それはある商品の宣伝であって、「やさしい」という原意とは離れて、聞くほうでも、あれは「広告」なのだと見破っていながら、それを許容して聞き流しています。いまや言葉も文化も、「きれいに」上塗り (coating) され、見たくない・聞きたくないものは隠され、『見えない死』(本の題名) 状態です。ものごとをハッキリとは云わない文学的な(?) 日本語の特徴のセイもありましょう。このような状態では、大事なコミュニケーション、人間同士の信頼関係が築けないのは、むしろ当然でしょう。

神奈川条約(日米和親条約)締結直後、黒船の甲板上で催された盛大なパーティについて、ホークスが編集した『ペリー艦隊 日本遠征記』は、次のように記録しています。

「日が暮れると、日本人は飲めるだけの酒をしたたか飲んで、退艦の用意にかかった。陽気な松崎は両手をペリー提督の首にまわし、よろよろしながら抱きしめ提督の新しい肩章を押しつぶしながら、涙ながらに日本語で、英語に直せば「Nippon and America, all the same heart」という意味の言葉を繰り返した」(Hawks, 第1巻、20章 376頁)。

松崎が実際に日本語でどう発言したかは分かりません。国内向けには到底いえなかった言葉(内容)であり、日本側に記録が残る筈もありません。外交上は、とてもそんな暢気な話ではないのですが、ほんとに「心が通じあえていた」らしい事実と、その優れた翻訳は十分に伝わってきます。幕末の最高に緊張した時ですら、堀達之助らは、一面では、こういう時代に生きていたのです。現代との対比でいえば、ことばや通訳翻訳の技術は不十分でも、まだ鎖国に等しい時期なのに、国

境をこえた人間相互のコミュニケーションがあつて、ある意味では、とても幸福な時代でもあったということになりましょう。

「殺す相手はだれでもよかった」という啞然たる《ことば》は秋葉原無差別殺傷事件(2008.6.8)にかぎりません。直接の犯人は捕まっても真犯人が分からないのは当然でしょう。それは《私たち文明そのもの》に起因していますから。現代人はこれほどまでに孤独で孤絶しているんですね。現代社会を特徴づけている「破局」に対して‘pandemic’(感染爆発)なる語を当てる人も出てきました。あえてこのような悲惨な例を持ち出したのは、達之助の時代からむしろ元気をもらえているからです。と云っても、ある国民的大作家(司馬遼太郎)が、「とにかく明治はすばらしかった」と書いていた趣意と同じでないことだけは、お断り致しておきます。

1. 長崎の蘭通詞と堀家

【通詞とは】 私が、オランダ通詞の末裔であることに違いありませんが、格別その史料に恵まれているわけでは全くありません。記録されているその一端をのぞいてみます。かれらは長崎の地役人ですから身分は士族でなく、「微賤軽輩」の町人にすぎません。とくに鎖国令(1635年)以後、オランダと中国とのみ「通商」はあつても「通信」(外交交渉)のない状態に転落し、幕府による貿易独占体制が強化されたため、通詞の性格も一変していきます。通詞もこの貿易を監督する幕府政治機構の末端に組み込まれたからです。

政治的外交を拒絶する体制が「鎖国」ですから、独立した外交官は必要なく置けません。通詞のみが、外的世界との唯一の接点にあり、外国事情に最も通じた情報独占者の位置にたつので危険視され、まことに些末な点にまで、たえず監視されていました。

しかし皮肉なことに、かれらをめぐる制約がいかに厳しくなっても、かれらのもつ情報および情報収集力にたよらざるを得ませんから、貴重な存在でもあったのです。そして幕末に本格的な「(政治的)外交」が再開されるや、「一言之誤より国家之大患を生」じるに至りますから、その重要性は倍加していくわけです。

【通詞と学者】 全体として、「外交貿易ばかりでなく、文化交渉においても主役をつとめ、蘭学・英学の発達の母胎」(板沢武雄 1954)となったのです。とりわけ西洋世界の自由な新世界を垣間見てしまった彼らです。自由でのびやかな世界への憧憬を抑えきれなくなります。かれらは、日頃、地役人(通詞)としての重苦しい職務にしばりつけられていたと同時に、志せば志筑忠雄(柳園 1760-1806)のように、蘭学・英学の研究者をめざして真理に仕えることも不可能ではありませんでした。こうして、ここに全く事情の異なる二つの世界 — 通詞と学者 — の狭間に立たされることになります。当時、すでに《サラリーマン凡人通詞の勧め》を語った者がいました。

「ただ通訳を能くして、御規定の旨をさえずれば事足りる也。…学俊の者は却ってその死然を得ず。必ずしも俊才を冀ふべからず。聞く者其理あるを歎ぜりと」

(今村猶四郎談、『甲子夜話』続編)

この記録を残した今村猶四郎とは一体どんな人だったのでしょうか。実は、逃亡中の高野長英を助けたりして危ない橋も渡ったといえますから、自戒の言葉として語ったのでしょう。しかし、幾分

かは自慢話の口吻もないではない感じもしてきます。

堀家の歴史に即していうと、五代・堀門十郎は通詞として有能だったらしく、仲間に妬まれて通詞職を解職されてしまいます。さいわい彼の実力注目していた薩摩藩主・島津重豪に招かれ、その『成形図説』（植物・農業エンサイクロペディア）に洋語を入れる編集に協力し、その序文に名前も出ています。かれ以後、長崎通詞堀家と薩摩藩士堀家とに分かれていきます。

一代において七代目の堀儀左衛門政信は、シーボルトへの書簡をとりつぎ、同事件に連座したとして失職します。その娘と中山建之助（実父は蘭通詞・中山作三郎武徳、実母は唐通事・陳氏の出身）が結婚して堀家の養子となったのが、堀達之助（曾々祖父）でした。

かれも下田で、ドイツの一商人リュードルフの通商願いを上に取りつがなかったことを理由に逮捕拘禁され、江戸小伝馬町での下獄四年余におよびました。私信で幕府に通商を願い出ても取り上げられないことは明白なので、取り下げるよう説得して本人も納得したので、堀はその書簡の能書にほれこみ習字の手本にすべく机の中にしまい込んだままにしていたのだという。しかし、それだけではない何か上層部をふくむ大事件の責任を、堀一人に押しつけられたような感じのする不可解な事件です。いかに十分気をつけていても、この有様です。堀は子孫に、「顕示を戒めよ」（分限を守り自己顕示欲を抑え自重せよ）との遺訓を残したといえます。歴代にわたるこれらの事件は、到底個人的な不注意によるというより、長年の制度疲労に起因する、神経質な監視体制の一環とみたい。洋学者が文明の面白さを知っても思う所を自由に表明できず、「政治上社会上の文明論に至りては一言半句を吐露するに由なし」（『福翁百話』62）。福沢諭吉は堀達之助のこの事件を、洋学者らの《内面の自由への干渉》の問題として引用し、真っ正面から論じています。

より一般的に、かれらを「我日本洋学の先人」として謳いあげた例は、同じく福沢の「故大槻磐水先生五十回追遠の文」（明治9年）にみえます。

「洋学の真理を信じて之を疑はず、…唯自己の精神 [=「独一個人の精神」] の発達するを以て無上の快樂と為し、…数万の兵を指揮してよく敵を殺し一時の勝を戦場に決したる者等に比すれば、其事の軽重、固より日を同ふして語る可らず」

なお堀のリュードルフ事件で罪状の根拠とされたのは、おなじく自己の主体的判断で行動してしまったこと — 「通詞一個之取り計らい」 — が挙げられていて、価値判断がまったく正反対です。

いずれにしても、自立した「知識人」の成立へと向かう際に発生する、自由と（宗教的、国家的）権力との間の軋轢です。ふつう「学問の自由」と近代的な権力との摩擦は、大学など近代的な高等教育機関が生まれ、「大学の自治」制度も生まれていく過程で発生するものと理解されてきましたが、長崎の通詞や、江戸の蕃書調所などで既に始まっていたといえますから、その最初の体験者・犠牲者が、かれら通詞であったといえましょう。

【開クベキモ蘭学、恐ルベキモ蘭学】 従来、私は当時の精神的風土を特徴づけるキイ・コンセプトとして、しばしば「両面価値感情 (ambivalence)」ということばを多用してきました。通詞たちのこわいもの見たさ、恐怖と憧憬もそうでしたが、「第一級の開明官僚」といわれた川路左衛門尉聖謨や水野筑後守忠徳らもそうでした。後者は、堀を取り調べて下獄させたその人に他なりません。か

れら自身も洋学の必要、開国の必然性が時代の要請であることを人一倍承知していながら、否、知っていたからこそ、その「開国尊信ノ余弊恐ルベシ」として、堀ら洋学者に厳しく当たったのでした。《開国》とは、ただ港や国を開けば済むといった単純なものとは大違いです。最近の規制緩和と政策だけを見ても、新自由主義という名による競争至上主義がどれほど多くの失業者を生み格差社会を蔓延させているかをみれば、想像にあまりあるというものです。《開国》は外へ開くと同時に、国際社会に対して「自己を国＝統一国家として画するという両面性」(丸山眞男『日本の思想』)、内への求心力が備わっていてこそ可能となります。西欧のキリスト教に匹敵するような内部統一の力が日本になければ、あらたに作るしかないという明治憲法立案者の伊藤博文は考えました。それは「国家秩序の中核自体を同時に精神的機軸とする」デザインの制度化でした(明治憲法第三条:「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」)。これは国民(＝四民、臣民)全体に、キリスト教に代わって拠り所となり、強力な求心力を促して止まない、疑似宗教的な「國體」(＝政治宗教)を創出して、それを国家の機軸に据えたのです。

【蘭語から英語へ】 さて英国軍艦フェートン号の長崎港襲撃事件(1808年)に動揺した幕府は、「国防上の理由から」蘭通詞らに英語(とロシア語)の兼習を命じます。これは欧州の地図のうえで、その学習言語をオランダから海峡一つこえた英国へ移動させたというだけの話ではありません。そもそも蘭通詞の存在は — 西欧とはオランダ一国とのみ長崎にかぎり交流を認める体制のために設置された。 — それ自体、幕府の《鎖国体制》を維持継続するためのものに他なりません。ところが、いまや秘密裡に開始された英語などの兼修は、幕府みずからがその鎖国政策を内側から否定する自殺行為につながるもので、結果的に《開国》への助走となったのです。

さらに偽装漂流米人マクドナルド Ranald MacDonald が、長崎で約半年間、14名の蘭通詞に初めてオランダ訛りのない native English を教えます。当然このなかに堀達之助も入っていたに違いあるまいとの先入観から、戦前の大先生たちが堀をもマクドナルドの生徒にしてしまったのですが、この通説は1981年に長谷川誠一氏(現在、札幌現住)によって実証的に訂正されます。姓は同じ堀でも達之助ではなく、別家の堀寿次郎が生徒です。とすれば、達之助自身はどこで、いかにして英語を学習したのかということになりますが、それは自学自習だと取り調べの場で述べています。尤も、彼が生まれた長崎の中山家や堀家は、フェートン号以来の英語兼修者たちと近い姻戚関係にあり、その有利な環境のなかで育ちました。

【吉田松陰】 先年亡くなった吉村昭さんの『海の祭礼』(1986) — これは通詞・森山栄之助とマクドナルドを主人公とした歴史小説 — をみていましたところ、14名の生徒のなかに「達之助」の名はなく、正確に「寿次郎」と書かれているではありませんか。まだ研究者でもまちがったままに引用していた時代に正確な記述が小説でなされている。これにおどろいた私は、吉村さんと知己になり、彼の片腕であった史家、谷澤尚一さんに助けられつつ達之助史料の収集をはじめ、その史料も使って吉村さんが、堀達之助を主人公としたあの『黒船』を書いたのです(雑誌 1989-91, 中央公論社 1991)。

達之助の終焉までを記した吉村さんの小説『黒船』最後の文章は、「半年後、日清戦争が起り、八月二日、長崎の清国領事館は国旗をおろし、翌日、領事張桐華はイギリス汽船で祖国に去った」となっています。これは歴史の事実を年表から書き写しただけのものとは思えません。私の、それこそ身びいきな読み込みにすぎませんが、「達之助は、これからアジア侵略へと突き進む《近

代》日本を知ることなく、波乱にみちたその生涯を閉じることができた」。吉村さんは、こう云いたかったのではあるまいかと想像しています。

その吉村さんが『黒船』を書くにあたって喜んだのは、達之助が二度にわたり、吉田松陰との濃密な交流をもっていたことでした。

吉田寅次郎との最初の出会いは、達之助が下田詰めの時にさかのぼります。金子重之助とポーハタン号に出向いて密航を企て失敗したのが嘉永七年三月二七日。先輩同僚の通詞・森山は幕吏に登用され隠密もかねていて、ポーハタン号にも赴いて吉田らの探索を行っていたのと対照的に、堀はほとんど動きを示していません。かれは、拘束された吉田らにどのような態度を示したのでしょうか。役人らしからぬ人間的な対応でもしたのでしょうか。後年、二度目の獄中（江戸小伝馬町）にあった松陰が義弟の久坂玄瑞にあてた書簡には、こうあります（安政 6.8.13、在獄→久坂）。

「口は蘭通詞 堀達之助也、堀は小子下田之厄之節も出役仕居、通詞中の才物なり」

獄の入り口に近い部屋を「口」といい、松陰は「奥」の部屋にいました。海外事情の収集に躍起となっていた松陰としては、特にひとかどの人物とみていた通詞の堀に接近しようとしたのは当然でしょう。このとき堀は松陰を取り調べる側にありました。ところが五年後の安政六年には、すでにリュードルフ事件により先に在獄四年であった堀は、牢名主として松陰を迎え入れることになります。つまり今度は同じく取りしらべられる罪人同士としての再会です。時代の変転・暗転かくの如し、安政の大獄は前年から猛威を振るい始めていました。

当初、死罪などと予想していなかった松陰は、今後の利用価値も考えてのことでしょうが、まるで攘夷の先輩同志に頼み込むような調子の書簡を残しています。

「堀先生は…追付け御出牢にも相成るべくやと察せられ候。〔長崎へ〕ご帰国に相成り候へば小生国元〔萩〕よりは通路宜敷き故、後来の議克々頼み奉り候段御申上げ願ひ奉り候」

しかるに、その九日後には一転して、

「堀達之助、この人にも世話に相成り候。首を葬ることは沼崎と堀江に頼み候。代料三両計りもかかり候よし、堀にも一両、小生生前の恩恵を忘れざる志を表して御贈り下さるべく候」（十月二十日付）。

その後の劇的展開は言語を超えている。

十月二七日、松陰処刑。（1859 安政六年）

二日後の二九日、達之助出獄、蕃書調所翻訳方となって英和辞書編纂に邁進。

最下層の役人世界しか知らなかった達之助が、松陰だけでなく獄中にあった錚々たる「尊皇攘

夷」の志士と交流した体験から得たものは計りしれなかったと思われます。「彼は幕府の先端に居て一種の技術専門的役割[通弁翻訳]を果たしていただけではない。いわゆる勤王の志士たちとも接しあうところがあった」(古田東朔 1968)と指摘された通りです。松陰の義弟にあたる久坂玄瑞が、出獄後の堀の塾に通って約一年間、英語を学習したのも(1860-61)、松陰の勧めによること間違いありません。志士たちと連日「処士横議」[藩の枠を超えてヨコに広がる交流]して「攘夷」— 日本国独立への普遍的権利の主張として「開国」につながる — の秘策を練りながら、同時に英語学習に精を出していた姿のなかに、幕末の雰囲気のみならず(久坂はまもなく禁門の変で戦死。1864 元治元年、25 歳)。

久坂玄瑞の以下の書簡(万延元・5.19)の認識は、かなり早いものに属しましょう。

「小川町蕃書調処教授堀辰之助方へ通ひ申候、英学は未開、字書も乏敷候得は、少々困難は御座候。此度帰自米利幹者之咄にも、外国大抵英文行れ候由御座候、蕃書を読からしては英学便利の様被考候、今時可最慮者 英吉利也」

「このたびメリケンより帰りし者」とは、同年 5 月 6 日に帰国した福沢を指すものと思われます。まだ袖珍英和辞書は編纂中で英語学習は難渋していましたが、今や世界は「英語」の世の中であることを福沢などから知らされていました。福沢は 11 月から外国方の翻訳方に属することになりますから、堀と面識ができたと推定できます。

2. 日米和親(神奈川)条約「誤訳」問題

いわゆる「誤訳」とされてきたのは、次の二カ条です。

11 条:「両国政府ニ於イテ(either of the two governments)…」

12 条:「今ヨリ十八カ月ヲ過ぎ(within eighteenth months)…」

さらに『日本遠征記』第二巻の末尾には、この条文を左右対照させて掲載していますから(左側に日本文、右側に英文)、どうみても日本側の「誤訳」としか見えないでしょう。

同書第一巻、補章には、「第十二条は within eighteenth months [批准は 18 カ月以内に] 交換されるものとする」とあり、「within という英語の意味をよく説明すると、彼ら日本人は非常に穏やかにこの点の異議を撤回した」とダメを押している。

戦前から日本でも、たとえば著名な竹村寛『日本英学発達史』(1933)のように、「幕府としては非常な失態で、条約を和訳した森山栄之助、堀達之助、名村五八郎等の通詞は、その責任を免れることは出来ない」と、名前まで列挙して非難していました。それと、明確に姿勢を異にするのは古田東朔氏であり(1968)、堀や立石が neither..., nor..., を正確に駆使している例もあげながら、かれらが either と both を取り違えることはあるまいとし、これは幕府側の「政治的配慮のなされた意識的誤訳」ではあるまいかと、政治的誤訳説を提起しました。一概に通詞の語学力の低さにだけ責任を求めることに対して鋭く疑義を呈したことになります。

細部の詳述を省略しますが、そもそもこれが問題化したのは、調印された条約文(1854.3.31)をアダムス中佐が米国に持ち帰り、上院での批准と大統領の署名を得て、下田に到着した(1855.1.26)際のことです。12 条には「今より後十八ヶ月を過ぎ」とある和文を楯に、8 か月も領事

の来日が早いではないかとの日本側の抗議にはじまる。それに対して、さきに述べた‘within’をめぐる米側の初歩英語教育がなされ、あっさり日本はそれを認めてしまったので表向きには一件落着です。対馬守までも「十八个月内外は全く此方之間違ひに有之儀明らかに相分かり候、夫故に此度之渡来も…何共気之毒に存候」(『幕末外国関係文書之八』)と全面降伏しているのは不思議でもあります。

ちなみに云いますと、誤訳をふくむ二種の条文が正式に残りましたが、双方だれも、お咎めなしです。双方とも事情を理解しあっていたためでしょう、実際面では何の不都合、不便も生じなかった証拠です。誤訳は存在しなかったも同然の結果となります。

新しい段階は、1975年に町田俊昭氏が「原因はアメリカ側に、…ウイリアムズと羅森の二人こそ誤訳の元凶」とする論文にはじまります。その経過は配布資料に紹介した条文作成過程表(町田氏の作成)であきらかでしょう。表むきには一度として直接の英文和訳などなされていないのです。日米は蘭語で交渉し互いに合意に達しました。それを米側は英訳し、さらに漢訳しました。日本側は問題を先送りしたかったところ、こちらに有利な米側の誤訳をみせられて「シメタ！」と誤訳のまま受け取り、知らぬ顔していたのでしょう。しかし、もともと合意したのは蘭文であり、英語も既に少々わかり、誤りは英文にないのを知っていましたから、早々に折れたのでしょうが、日本側は誤る必要まではなかった筈です。ここには、英語(洋語)は蛮語であり、漢語に誤りなどある筈がないという、漢文至上主義の伝統がまだ生きていて、それを利用したものでしょう。

ところが、それで終わりではないのです。さきに町田氏は英文から漢訳したのはペリー側のウイリアムズと羅森だとしていましたが、近年の三谷博著『ペリー来航』(2003)は、漢訳を見たあと、日本側でより明確な漢訳文を作文し、それを米側に再度確認すべく持参したら、あっさりこれで OK だと米側が認めてしまったのだと資料的にも主張しています。もともと森山栄之助が自分の通弁の過失を糊塗すべく、「森山の始めた作偽」は米国だけでなく、「交渉の成り行き上、全権林大学頭も加担者に巻きこんだ」という森山悪人説です。

*この著、『ペリー来航』は「条約交渉における言語と通訳の問題に注目しながら」書いたものだと著者は「まえがき」に記し、そのなかで最も興味深い例として、この誤訳問題をとりあげている。

いまのところ私は、三谷説を全面的には肯定していません。犯人探しよりも、「アメリカの通訳たちは日本人と協同して(in coöperation with the Japanese)条約を中国語、蘭語、日本語で作成する仕事に従事した」(ホークス編、第1巻、20章)とあるように、複雑な4か国語の通弁翻訳の過程そのものの中に誤訳の原因があったとみています。たしかに外交文書は玉虫色のものだといわれますが、それはその解釈をめぐることであり、条文自体に異なる二つの version が残ってしまい、両国のホンネが記録に残ってしまったのは(なおこの条約には正文規定を欠く)、なんとも双方、不慣れというか迂闊なことではありました。

幕府としても、この「誤訳」問題は、あらためて英和辞書の緊急性を痛切に認識させられることになりましたし、堀達之助個人としても当地で《英学との邂逅》を切実に経験しました。下田の長楽寺で達之助は、言語学者ロプシャイト Lobscheid と膝つきあわせて一語一語条文の読み合わせを行い、こうして得られた親密な交友関係を通じ、ロプシャイトから—ドイツ出身の彼はドイツ語で

署名して一、メドハーストの英漢および漢英字典・上下二冊(計 4 冊)をプレゼントされる幸運にめぐまれたのです。私の想像を含めての理解によれば、堀達之助は、まもなく迎える4年におよぶ下獄の後に辞書編纂を正式に下命されることになるのですが、それをただ受動的に拝命するに先立ち、下田における《英学との邂逅》を通じて辞書編纂への主体的・能動的な動機づけを得ていたと云えないでしょうか。資料の裏付けを欠きますが、英和辞書編纂への心理的準備が整いつつあったのではあるまいかと推定したくなってきます。

ところで堀達之助といえ、ペリー初来航時には主席通詞であり、黒船に向かって “I can speak Dutch” とだけ英語で叫び、日本側の得意とするオランダ語を土俵とする交渉に引き込んだ成功が記憶に新しいものです。これが公式の外交場面で使用された最初の英語とまでいう人もいます。しかし通弁(通訳)の仕事は、他の数人の有能な通詞もいたことですし、アメリカ側でもあらかじめ蘭語や漢語もできる通訳者を同伴したことによって交渉が可能になったのです。堀は蘭語はよく話せたものの、英語をはじめとする会話全般を苦手としていました。とくに、出獄いらい外国人との応接場面から 10 年以上も離れ、もっぱら英和辞書編纂事業に専念したあと、慶応元年、箱館勤務でふたたび現場にもどされたとき、つぎのような芳しからぬ評価がうまれているのも、無理からぬことかも知れません。

「達之助儀旧来語学相応出来候者ニハ候江共 通弁之儀は近来久々休廢致候趣ニ而 席上応対入組候談判等毎々 差支候儀御座候ニ付…」(箱館奉行御用留)

江戸のお偉い学者先生だというから、なにさまかと思えば、さっぱり通訳もできない役立たずじゃないか、というわけです。達之助最大の功績は、下田における《英学との邂逅》に始まる学究的な仕事、英和辞書編纂という不朽の大事業にあったと私はみえています。

3. 『英和对訳袖珍辞書』(初版～4 版)

袖珍辞書は初版(1862)から4版(1871、薩摩辞書・再版)まであり、その序文のタイトルだけ並べてみると、(以下、「袖珍(辞書)」と略称する。)

a FAMILIAR METHOD 1860 PREFACE HORI TATSUNOSKAY

b 英和对訳袖珍辞書・初版 1862 PREFACE HORI TATSUNOSKAY [原稿発見 2007]

c 改正増補 // 再版 1866 PREFACE, P for the SECOND EDITION
/ HORIKOSI KAMENOSKAY

[ヘボン『和英語林集成』初版 1867]

d 和訳英辞書 3 版 1869(明治 2) PREFACE TO THE REVISED EDITION

改正増補和訳英辞書序 日本/薩摩学生 A Student of Satsuma

「序 皇国ニ英学ノ行ハルルハ他ニ非ラス…、コレヨリ先ニ堀先生英ノ字典ヲ訳スルニ我ノ…皇国ノ語ヲ以テシテ…」

e 大正和訳英辞林 4版 1871(明治4年) 大正増補和訳英辞林序

日本/薩摩学生 前田正毅/高橋良昭

「序 明治己巳ノ歳予等上海ニ於テ…、辞書ヲ刊版シ……」

*因みに、この4版には達之助の次男・堀孝之がウェブスターの発音記号を初めて採り入れるなど編集に協力していて、和文序文にその名も明記されています。

少しコメントすれば、

b 初版の前年にも堀は、**a** 『ファミリー・メソッド』の序文を英語で書いている。これが最初の英語序文だと云われる。**c** の編纂主任は何故か堀越亀之助に代わる。**a**～**c** までの序文は英語のみ。これらを当時の読者は和書としてではなく洋書と認識していたかもしれぬ。**c** と **d** の間にヘボン『和英語林集成』初版刊行 1867 年が入り、**Satsuma** と **u** が入ったのは、一見ヘボン式ローマ字の採用かとも思われるが、それにはだいぶ早い。しかし、同様のことはそれ以前にもあり、当時の宣教師の著作にも見られるものである(木村一氏の教示による)。**d** において初めて序文は英語の他に日本語も加わる2種になるが、日本語序文の方は厳めしい漢文調であり、普通の調子の英語序文と対照的である。**e** に至って漸く日本語だけの序文となる。完全な和書の形式と云うべきか。

4. 英和辞書 (1862) から国語辞書『言海』(1891) へ

【開国と辞書】 近代的な本格的な国語辞典といえば、蘭学の家系に属していた大槻文彦による『言海』(1891 明治 24 年初版)をあげるのに異存はないと思われませんが、かれはその編纂(明治 8 年開始)にあたり、ウェブスター英語辞書を参照し、まず手始めに自ら『英和大字典』を作成していました(明治 6 年、AI～AN の部分の原稿が早稲田大学図書館に残っている。)。このように国語辞典が外国語辞書の《翻訳》を契機としていたのです。この事実を驚いた少年が、のちに漢字字書に生涯をささげた白川静でした。

考えてみれば、それも無理からぬことでした。自国の言語、その組織的体系的理解(文法など)、したがって自国の文化総体を対象化して形象化する必要もまた、外国(語)からの側圧によって初めて自覚されたからです。自国の文化や思想を整序する海図、座標軸もまた存在せず舶来であり、一例をあげれば、それはキリスト教などの外来思想(宗教)の — 信仰としてよりも、普遍的な時間・空間観念などの《座標軸》を提供してくれるものとして — 影響のもとに自覚され生まれ行ったといえます。

このように最初の『国語』辞典に先んじて、まず『外国語』辞典、仏和・蘭和・英和などの二カ国辞書が生まれ、幕末の開国とともに本格的な「英和辞書」、すなわちわれわれの『英和対訳袖珍辞書』(1862 文久 2 年)が編纂されたということほど、日本の近代化を象徴するものではありません。しかも、その時期の先後だけでなく、国語辞典の編纂も当初は国家事業として開始されたものの、やがて大槻個人が引き取り、個人の刊行となったのに引き比べて、英和辞書の方は当初から幕府(国家)の中枢機関である蕃書調所の直轄により — 刊行は洋書調所ですから国書として刊行された — いち早く出版されました。いかに対外関係が、それを何よりも優先せざるをえなかった、緊急の至上課題であったかが分かるというものです。

【教授法と辞書】 英和辞書の刊行が急がれた直接の要因は、開国後の外交文書をいつまでも蘭語に依存する日本側の甘えに釘をさされ、五年後には英語などの使用を確約させられたことが主なものでしょうが、それだけでなく、辞書の緊急性が従来の外国語教授法そのものに起因していた

からです。

幕末の英語学習法が蘭語学習における文法=訳読法を踏襲しただけでなく、はるか以前の漢学学習の伝統も、基本的にはこの同じ方法によるものだったからです。さきにも文法を習い、ある程度習得できたら各自辞書を頼りに予習して会話に臨むように訓練されましたから(茂住實男 1989)、どうしても辞書は必須だったわけです。「子どもが五、六歳になると、正座させられてオランダ語と英語の素読を行った。武家が幼児に漢文の素読を授けたのと同じように、これが長崎の和蘭通詞に伝わる家風であった」と堀孝之(達之助の次男)は明治末年に回想しています(堀孝彦 2001)。まさにこの方法を採用すればこそ、《近代化》が大車輪で回転できたのですが、それは直接の会話を通じた外国語習得と、それに関わるすべての問題を犠牲にしてきたのです。現代におよぶこの問題の源は、はるかにここまで遡ります。

このことは通弁・通訳を軽視した杉田玄白『蘭学(又は蘭東)事始』の視点とつながります。たとえば「其頃までは、彼〔通詞の〕家々は通弁迄の事にて、書物よみて翻訳する等いふ事もなかりし時節にて…」と、「西肥〔長崎・佐賀〕の通詞輩」を軽蔑視した視点で、もっぱら江戸の蘭学を称揚しています[傍点は引用者]。江戸の蘭学からみて、通詞が町人身分だったことも原因の一つかもしれません。しかし同書の影響は絶大ですので、会話軽視の歴史は近代化の基本にまで根ざす奥の深いものといえましょう。

【近代辞書の見出し語】 だれしも今日、辞書の見出し語が五十音順、アルファベット順であることを奇異に思い、気にとめる人は少ないと思われませんが、西欧でもそうなったのは 17 世紀あたり以降のことらしいです。「読む辞書」から「引く辞書」への転換—知の爆発！—が、近代化の実相です。

従来の「読む辞書」の語順は天文・地理・暦などのカテゴリー別の分類になっていましたから、知りたい言葉にまで辿り着くのに大変な時間を要します。いまや効率よく「引く」(=知る)には索引したい言葉まで直行する必要があります。この超スピードこそ近代の要求するところですよ。

『言海』も、その「編纂ノ大意」でイロハ順を採用しなかった理由を述べねばなりません。明治 24(1891)年に完成した『言海』を大槻が福沢のもとに届けに行ったら、かれは眉をひそめて『五十音順で寄席や銭湯の下足札が引けるか』といったのです(安田敏明 2006)。福沢のように蘭語や英語の辞書を引き慣れていた人の言葉とはとても信じがたいことなのですが、彼ほどの人ですら当時の常識はそのあたりにあったのでしょ。

決してこれは表面的な変化ではなく、ここには基本的な姿勢、実は世界観・人生観にかかわる大転換が横たわっているのです。従来生活していた階層的タテ秩序の世界から、水平的平等主義へ世界への一大転換です。高貴な語のすぐ後に卑猥な言葉が続いても驚かない、新しい主体になっている必要があったのです。しかし、そういう主体の側での準備は、固定した秩序の認識枠をいったん破碎せねばなりませんから、いきなり個人主義的なヨコ社会に切りかえるのは大変だったことでしょう。これは、ここで話する西洋語の翻訳(和訳)に直接かかわる問題なのです。

5. 日本史は翻訳史である

【無謀な洋語翻訳】 英語とのつき合いは、せいぜい 200 年、蘭語にしてもその倍くらいですが、1000 年以上も以前からの漢語・漢文との交流—実は翻訳！—の蓄積の上に、初めて蘭語・英語

など西洋語の翻訳・受容が可能になったのです。そこで視野を拡大してみましょう。

古代の日本は、隣国の高度に発達した仏教や儒教に代表される大陸の先進文化を受容できる言語も文字も持っていませんでしたから、それを伝える漢語を移入し、漢文でもって記述し、かつ思考しました。しかし、そのまま移入したのではなく、長い時間をかけて移入漢語も日本化し、訓をつけ、かな文字も生みだしました。上層身分の者は、口語体との言文一致になるまで、輸入外国語(漢語)とともにある二重生活を続けてきたのですから、過激に言えば《日本史は翻訳史である》という一面をもってきたのです。(私はこの講演であえて断言的口調でお話しています。) その上に洋語とのつきあいが重なりましたので、漢語・和語・西洋語という三元の三重複線言語として、今日の近代日本語が誕生したと云われています(石川九楊 2008)。

先進の異文化言語とともにある生活ということだけならば、かつての西欧人もまた、ギリシャ・ラテンの古典語を受容し、それでもって思索したのと同じであり、東西ともに異文化接触を通じて、まず異国の文化を吸収し、ついで同時に自らの文化をも発展させてきました。しかし日本人が蘭語・英語を学ぶ経験は、かつて漢語漢文を受容しそれを日本化できた事情とは決定的に異なります。前者のばあいは類似し共通する儒教文化圏には属さず、同じ印欧語属とは全然、言語も文化もその系列を異にするため、漢語のように日本化できないからです。一体、東洋人である私たちは、このような質の相違する西洋(語)の《未知の観念》をどうやって理解し、それをどのように表現するかという巨大な問題です。あとで具体的に述べるように、近世・近代の日本が洋語に接したとき、まだタテ社会(封建制秩序)のなかにありながら、そのときすでにヨコ社会(近代市民社会)を発展させ、そこで新しく生み出されていた近代科学や社会思想を翻訳し受容しようとしたのですから、実はこれは、西欧人の想像をはるかに超える、とんでもない実験にわれわれは取りくんだことになりました。

【語と字との乖離】 その際、現今のようにやたらとカタカナ語を乱用する安易な態度はとらず、必死で翻訳しました。たとい原文の意味は頭では解っていても訳語がなく困ったと、堀達之助の助手をつとめた箕作貞一郎(のちの麟祥)が明治2年に述べています。

ここには把握された「語」(=概念)に、いかなる「字」(=記号)を当てるかという困難な問題がありました。現代の常識からすると、「語」が定まれば「字」はおのずからきまってくるはずですが、日常語(俗語)と文章語との間に大きな距たりがあった洋学受容の初期には、「語」を理解してもそれを表記する「字」を指定しないと、訳語として十分なものとは意識されませんでした(森岡健二『近代語の成立』 p.272)。このように訳語における「語」と「字」との遊離があつて、それを一致させることによって現代漢語形成の土台が作られたと、専門家はいいます。

この事情を正直に告白している面白い—貴重な—史料があります。フェートン号事件以降、試作された英和辞書である『諸厄利亜語林大成』1814の叙と題言の中の叙述がそれです。(一部抄出引用)

叙 皇国の俗言に帰会し、是に配するに漢字をもってし、…本朝の雅言正語に拙く、又漢語の要領に疎きを以て…故に俗言を厭わす凡て国字を以て是を注し、
 題言 …故に其当否は知らずと雖とも、訳字は必ず漢字を以てし、…

つまり正装で臨むさいは、「其当否は知らずと雖とも」と正直に書いています。とにかく漢字を使用せねばならぬという伝統の支配下に、その当時もあったことがわかります。こうしてその辞書は、文章語と日常語とを折衷する体裁をとったのです。前近代と近代との混在折衷の好例でしょう。

これは、さきにお話した日米和親条約誤訳の原因とも関連していた漢字崇拜というか、漢字漢文至上主義の現れでもあります。「上代以来数千年、中国などの先進文化を漢字という書きことばを通じて受け入れてきた。翻訳されるべき先進文明のことばには、‘穏やかなる日本語’にはない重要な意味があるのだと思わせる」伝統のもとにあったのです(柳父章『翻訳語成立事情』1982)。少し付け加えますと、漢字さえ使用しておけば、それがいったい何を意味しているか説明する責任を免れることができるという点も含まれていて、興味ふかいですね。fuzzy な曖昧さをもってなる日本文化の特徴を考えるばあいヒントになる重要な点です。

【和製漢語の創作】すでに『解体新書』凡例は、「訳に三等有り。翻訳、義訳、直訳」と記していました。「義訳」とは、その要点を的確に衝いた岩崎克己のいうように(『前野蘭化』1938)、「両国語の言語に於いて一致した概念が無いために生ずる、創作的翻訳とでも名付けるべきところのもの」であり、『解体新書』の述語の大部分は義訳(むしろ翻訳的義訳)を以て成立していると分析しています。

それでは、どのようにしてこの難関に挑んだのでしょうか。外国語の音訳でもなく和語の転用でもなく、意識した和製漢語によって、近代的な語彙そのものを新造したのです。言語学の専門家も、幕末から現代に至る「日本の語彙は、訳語によってほとんどその土台が形成された」と裏付けています(森岡健二『近代語の成立』1969)。初期の辞書は、《外国語辞書》であっただけでなく、近代的な語彙を新しく始造することを通して、同時に《国語辞書》の役割をさえ負わされていたことになります。

でも、そもそも《観念》のない所に、どうやってコミュニケートできる《言葉》をつくるのか。福沢がいうように、「元来文字は観念の符合に過ぎざれば、観念の形なき所に文字を求むるは、恰も雪を知らざる印度人に雪の詩を作らしむるが如く到底無用の沙汰」なのです(福沢 1897 「福沢全集緒言」)。そう云いながらこの福沢自身は、もっとも早く最も多くの訳語(=近代日本語)を作りあげたその代表格にあたります。

この講演の最後にのべることにつながりますが、言語は日常《生活》のなかで変化し、たえず揺れを伴い発展していくものであり、本来それが文化の姿であり、それこそが人間の歴史にほかならないのですが、開国前後の日本にはとてもその経過をじっくりと味わいつつ言語形成していく余裕などありません。では、どうしたか。十九世紀半ばの西洋の学問を完成体とみなして固定し、即席で日本語に置き換えるのです。だからことばのもつ意味の重層性を捨てる。「平板な一つの意味しかない。しかし一つの語を一つの意味にすると学習がとても楽です」(鶴見俊輔『歴史の話』対談、1994)。

軍隊のコマンドは一語一意でないと役にたちません。多義的な言葉の揺れなど持っていては命令になりません。袖珍英和辞書編纂の協力者・西周助(後の周^{あまね})は、のちに『軍人勅諭』(明治 15 年)草案の作成にかかわるなど堀達之助とは異なる出世コースを上昇していきますが、『五国対照兵語字書』(明治 14 年)序文において、兵語の統一は「国の存亡に関する」と記している通りです。袖珍英和辞書・初版は、もはや一語一意の水準を遙かにこえています。基本思想としては未だ

その圏内にあるように思えます。

実際問題として、その他の選択肢は森有礼のような英語国語化案でも採用しないかぎり、なかったといえます。たしかに幕末いらいの語彙新造法によれば、学習は早く《近代化》は促進されます。しかし、です。いったい何を犠牲にして、そのことは可能になったのでしょうか。現今の学校教育で、歴史関連の教科が極度に暗記もの扱いにされていることとも、— ことわるまでもなく暗記が不要なのではありません。何のための暗記なのかです。— 関連ありそうです。

〈理+性〉から「理性」という新語を作成しました。「理性」自体にも「性をおさめる」(中国古典)とか、「万物の本性」(仏教)とかの意味もあったそうですが、新語の「理性」は朱子学のキイ概念である「理」や「性」を離れてしまい、なんといっても、ratio, reason の翻訳です。多くの人は、「理性」ときけば、‘reason’のことだと連想しつつ理解している場合が多いでしょう。こうなると漢字(の字形)は同じでも、新旧の漢字概念が混在し、むしろ教養人ほど見分けが困難にもなります。

またたとえば、西欧語の right, Recht, droit は、いずれも右、正、権などの意味をもちますが、日本では「権利・権理」と訳されました。このばあい「Right 権利(理)」が自己主張を「正」とみる西洋文化のなかで使用される時と、自己主張は控えられるべき、むしろ「悪」だと考えられている環境でもたらす意味とは、まったく逆になりましょう。これは基本問題ですが、ことほどさように語彙だけでも、文化価値とかかわり複雑極まりありません。

【古典的教養との断絶】「この種の革命は、はなはだしく性格を異にする他国の文化を受け容れそれにおのれを適応させようとする時に、恐らくやむを得ない、また最も賢明な方法であったのであろう」ともいわれています(和辻哲郎「日本語と哲学の問題」1929, 1935)。

* 和辻のこの論文は「国語」でなく、相対化された筈の「日本語」と記されているにもかかわらず、特殊な言語の特質を論じることが、同時に日本民族の精神を解釈することにあると考えられている。和辻倫理学全体が国境を超えない(超えようとしない)一国倫理学となるのは自然な結果である。

とりわけ近代日本語は、それに先立つ語族、語源(思想)から切断され、古典的教養の非連続をもたらしてきました。もっと強いといいますと、それは魂を奪いとられるに等しい選択でした。極端な例に属しますが、かつての植民地時代の台湾に生まれ小学校(当時「国民学校」の名でよばれていた)まで生活した私は、現地の台湾出身の学友とも机を並べていました。差別やイジメもしましたが、ある民族から読み書きどころか、自国のことばで会話することさえ奪って大日本帝国の国語を強要する文化破壊が、どんなに粗暴な暴力であるか—明確にそう把握できたのは後年のことですが、一ひとりさびしく教室や校庭にいた彼(陳守和君)の姿は、いまでもはっきりとこの目に焼きついていきます。これも「すばらしい明治」の国家政策にもとづくものでした。このような例でなくとも、私たちは、言語でもってつながってきた古典的教養との断絶のうえに、それを忘却することによって、今日の日本語彙が成り立っていることを忘れてはなりません。

西欧世界のばあいは、ギリシャ・ラテンの言語や教養は、断絶せず変化変容して連続的です。だからかの地の革命・革新は、先祖がえり、伝統の再発見・再解釈という形をとれます。たとえば西欧を代表する思想史の一大テーマは、「自然法」natural law の歴史的変遷・展開(古代・中世・近世・近代など)をめぐるものです。安易に「思想史」と訳されてしまう”History of Ideas”という語は、

文字通り「諸概念の〔読み替えの〕歴史」なのです。その意味で、我田引水を承知で云いますと、《翻訳史とは思想史でもある》ということになるのではないのでしょうか。

それが日本で非常に困難な事情は、ご理解いただけると思います。多かれ少なかれ翻訳には、語義のズレが必然的です。しかしこれを他面から積極的に見直すと、このズレをもたらすものは何か、それはこちら側にも独自の文化が存在していた証拠であるという側面が浮かびあがってきます。この面を強調すれば、《必要な「誤訳」は一種の文化財》であるとも云え、異文化・異思想との接触による切磋琢磨は、新思想をうみだすチャンスでもありえます。このような可能性に一現実性ではないとしても一私たちは恵まれてもいることを、もっと強調して然るべきでしょう。

以上のことは、こうなります。西洋概念と初めて邂逅し、それをそのまま音写だけして日本語にすることなく、漢字の新しい組み合わせで翻訳した。当然そこには訳語の意味のズレが生じる。原意を離れ、いまや訳語としてのみ生きる別の概念の上に、近代語というものは成立している(加藤周一 1991 参照)。

6. タテ社会における西洋語和訳

幕末から現代に至る「日本の語彙は、訳語によってほとんどその土台が形成された」とさえいわれています(森岡健二『近代語の成立』1969)。今回 150 年ぶりに『英和对訳袖珍辞書』の手書き草稿や初版校正原稿が奇跡的に発見され、従来の通説の変更を迫られています。たとえばピカール H. Picard の英蘭辞書(1843, 1857)から英語の見出し語を採って(これはその通りであるが)、蘭語を(蘭和字彙などの)和訳語に置き換えたただけだったから、短期間に英和辞書ができたなどと云われてきましたが、そのような通説は再検討を要することになりましょう(いま原稿を解読して活字で出版する準備中です)。その分析をも活用して若干の訳語比較を紹介してみましょ。

a. Ethics, s 東西訳語併記の例。

この訳語は、東洋倫理の訳語から始まり、その後も東西倫理の併記となっています。

新発見の草稿の訳語は「躰方」だけでした。ところがその初版刊本では「修身齊家ノ教」が付け加わります(そのあとの「治国平天下」は除かれている)。校正のどの段階での追加かは不明ですが、最終時点での駆け込み挿入かも知れません。儒教的漢学派の巻き返しでしょうか。この併記が袖珍辞書 4 版(明治 4 年)までずっと続きます。

他方、明治6年の『英和字彙』(柴田昌吉・子安峻)は画期的な大辞典ですが、それには「禮法、五常之道」とあり、初版にはまだ「倫理学」の訳語は登場していません。「五常之道」とは、有名な「仁義礼智信」を指します。

明治 15 年(第 2 版);明治 20 年(同再版)に至って初めて「倫理学」が現れ、「倫理学、禮法、五常之道」となります。東西倫理の併記ですが、頭に置かれた「倫理学」の方が追加された西洋の Ethics からの訳だとわかります。

*「倫理学」という訳語そのものは、それ以前に、見出し語‘Philosophy’のなかの Moral Philosophy や Ethical Philosophy の訳語としてなら、すでに明治6年に出ていますから、実質的には明治6年から「倫理学」は登場していたといえましょ。

とにかく西洋を頭に出すものの、東洋倫理もずっと併記されてきた事実を指摘したかったのです。私の専門に属する日本における近代倫理学の問題として重要な問題ですが、現在でも実はこの両者の統一は得られておらず、内容的には依然として併記状態にあり、—これを私は翻訳倫理学と国民道徳論の二本立てとして把握しています。—その事情がはるか昔(明治初年)の辞書にその痕跡を残しているわけです。

b. civil engineering 「シヴィル器械」

袖珍辞書を離れる例ですが、久米邦武ほどの人でも、civil engineering をうまく訳せず、正直にカタカナ語入りで「シヴィル器械」と訳した(『米欧回覧実記』1878)ことが指摘されています(宮村治雄『開国経験の思想史』1996)。

Engineering(工学)とは、ほんらい道路や下水設備のような公共的 Infrastructure をいいますが、これを日本では圧倒的に軍事の文脈でとらえてきました。「袖珍辞書」1862 でも「砦ヲ築ク事」であり、『英和字彙』でも「築城」です。その後もずっと「土木」を、軍事のカテゴリーで実行してきたのが、近代日本の実相でした、

岩倉具視使節団に随行した久米邦武は、civil が military でも、mechanical な技術でもないこと、また「宗教上 ecclesiastical」に対する「民事上」のことであることも理解できていましたが、公益(public utility)としての civil な技術を想像できなかったのでしょう。これは彼個人の問題でなく、時代というか、それまでの思想の問題として実に興味ある事実です。

『英和字彙』1873 に面白い例をみつけました。見出し語‘Engineer’に出ている‘civil engineer’を「土木司」と訳して「ドボクカタ」とルビをふっていますが、他方、見出し語‘Civil engineer’の方には「民間土木官」の訳がついています。「民間」であって同時に「官」というのは、〈官から民へ〉のかけ声にもかかわらず両者癒着したままの現今の姿(道路特定財源問題など)を目の当たりにして、思わず噴き出してしまうからです。

7. 二つの訳語態度—説明的訳語か、既成単語依存か—

袖珍辞書(とりわけ初版)の訳語は、その 40%が「……ノ……」という句(フレーズ)からなる長い説明訳語であったのに対し、ヘボン『集成』では 7%に激減していると指摘されています。

それは単語となった漢語を借用したからです。

* 句はどのようにして単語訳に転化できたか、それは圧倒的に漢語訳が多くなるからである。しかし外国語[たとえば英語]を訳すのに第三国語[漢語]を以てするというやり方は、日本人本来の理解体系にもとづくものとは、本質的に違う。結局、訳語が日本人の基本的な象徴体系にもとづかないで、借用語に依存するようになった経路がこれでわかる(森岡 p.34)。それ以上、かれは述べていないが、「借用語」は、自主的・内発的思考過程の省略である以上、所詮「借用語」は「借用思想」に傾斜していかざるをえないのではなからうか。

袖珍辞書でも単語訳が増えている再版 1866 は画期的な進歩だと杉本つとむ氏は理解してい

ますが、果たして説明訳は未熟と言えるのかというのが森岡建二氏の問題提起です。その提起は、杉本つとむ氏らが堀越亀之助編纂主任の袖珍再版(1866)を「大いなる進歩」と評価し(杉本1999)、その主たる根拠を、初版の説明語訳が減り、再版の訳語が明治期まで使用・定着していく点に求めています。恐らく森岡氏は、これらの批評傾向を知りつつ、「果たして説明訳は未熟か」と提起しているように思えます。したがって『袖珍』とヘボンの『集成』を対象として比較しながら、同時にそれらへの評者である(森岡 vs. 杉本)両氏の対抗関係となります。

袖珍とヘボン集成とをならべて見ると、森岡さんが、訳語の初期に時を同じくして現れた二つの辞書(堀『袖珍』とヘボン『集成』)の態度について、次のように書かれていることが、長い引用になりますが、とても重要なポイントと思われます。

「ヘボンの訳が果たして語訳として適切かどうか、問題がないわけではない。ヨーロッパ的市民社会の概念である **citizen** が一体「人」や「町人」でいいのか。… 一般的傾向として、ヘボンは、社会的背景の差があるにかかわらず、外国の概念〔**Citizen**〕を、旧制度下の日本に発生した概念〔町人〕にむりに押し込もうとしているようである。ヘボンによると、**people** も「チョウニン」や「シモジモ」と訳されるし、その訳語から原語になっている社会的背景を感知することはむずかしい。ヘボンの訳は、外国の概念を日本人の生活体験の中に持ち込んで、日本的封建社会に完全に同化させようとするかのごとくである。…それに対して堀達之助等の訳は、訳語というより説明になっているが、日本社会にない概念をなんとかその背景から説明して、日本人に理解させようとしているようにみうけられる。

「素性正シキ都府ノ人」という時、少なくともそれまでの日本になかった外国の考え方が、ヘボンの「チョウニン」よりも忠実に伝えられているといえないだろうか。堀達之助等は、日本にない概念を、むりに日本的な概念に同化させようとしな。説明することによって、観念として理解させようとするのである。ヘボンの訳〔町人〕だと、概念は生活体験として理解できるが、しかし、それが外国語の真の理解といえるかどうかはわからない。堀達之助等の訳だと、概念は体験の裏づけがない代わりに観念としてなら把握できる。」(森岡 p.8-9)

要するに袖珍辞書の態度は、概念を知らぬ語は無理に既成語をあてはめず、説明して理解させようと苦心していたというのです。

Citizen の訳語をならべてみると、これに旧来の「町人」という便利な語に置き換えればどんなにか楽だった筈なのに、首尾一貫して「町人」を避け通しているかに見受けられます。

*ヘボン『和英語林集成』初版

和英の部 p.45「チョウニン」Town-people, citizen of a town, common-people, not samurai .

英和の部 p.15 「citizen」 ヒト、チョウニン、ニンベツ

もともと **Citizen** の袖珍訳は、蘭語の **Burg(h)er** の訳に拠っていることは明らかです。

Burg(h)er に対して『ドゥーフハルマ』は、「町人又ハビュルグル」と訳し、「町人素性正シキ由緒アル町人ヲ云ナリ彼国ニテハ此者トモ政道ニ事アル時ハ王ヲ助ケテ一方ヲ防ク者ナリ」と長い説明

を加えており、袖珍初版もこれにならない、「市井ノ人素性正シキ由緒アル市井ノ人ニシテ政道戦争ニモ加ハルモノナリ」としています。しかし、よくみると「町人」を「市井の人」にかえています。

これを参考にして袖珍の Citizen は、

初版：「素性正シキ市井ノ、市井ノ人住民。

再版：「素性正シキ都府ノ人、府中ノ住民」

であり、これが薩摩辞書・再版、開拓使版まで連綿と続いているのがわかります。「町人」を避けようと、なにか意地になっているようにもみえるのですが、いかがでしょうか。

新発見の原稿手稿にはこの見出し語 Citizen の頁は残されてませんが、Denization, Denizen が残っており、「異国ノ人ニ「シチセンシブ」[Citizenship でしょう]ヲ許シ与フル事 吾国民トナル」とあります。初版刊本も同じであり、現行の英和辞典では「帰化人、外来の動植物」です。堀達之助らは、これが「町人」とは別概念であることを感知し自覚していたからこそ、その義訳にこれほど苦心し、カタカナ語「シチセンシブ」までも動員している姿がみえます。それでは「シチセンシブ」とはなにか、何と訳すかはまだわからないが、とにかく「町人」とは違う何か、といったところでしょうか。

別の傍証例(袖珍)を加えます。Freeman に対して「免許ヲ受ケテ居ル人、素性正シキ町人 我邦ノ士分ノ如キ者」とあり、たしかに、ここには「町人」が出てきます(最後の訳、「士分ノ如キ」は混乱しているので除く)。この Freeman は現行の辞書では、①(奴隷に対して)自由人[民]、②(都市の諸特権を享有する)市民、公民(citizen)、③(ギルドの)親方など、性質の異なる語義が混在羅列しています。

その中心的な意味をとれば、「都市の特権をもつギルドの親方」などとなりましょうが、それこそが、経済史的にも正確に旧ブルジョワ「町人」を指すものです。まさか堀たち袖珍編纂者が大塚史学を知っていた筈などありえませんが、ぴったり対応してしまうから不思議です。

この問題は貴学会とは離れ、比較経済史のテーマになってしまいますので、簡略に述べます。旧型町人(=歴史とともに古い前期的商業資本)がそのまま、近代的なブルジョワ(産業資本家)に成長・発展していったという通説を真っ向から否定したのが、大塚久雄さんらの歴史・社会観であり人間観でした(ただし通説すべてが誤りとも言えません。堀孝彦「資本主義の精神と町人根性」、『近代の社会倫理思想』序章、1983)。それと同じ趣旨を袖珍辞書は、近代日本の訳語を求める必死の模索として追究していて、結果的にはこの日本資本主義論争最大の問題につながり、その根底において気脈が通じあっていることになるのです。それは偶然の合致だとしても、安易な借用で済ませない探求の態度・姿勢はスゴイと云わざるをえません。

明治維新をもたらした展開させた要因を主としてどこに求めるかは、日本人ならだれしも描きたいテーマであるに違いありません。再び吉村昭さんに登場ねがうとすれば、「明治維新というと、西南雄藩が仕掛けて、彼らが日本を正しく導いたように思われがちですが、植民地化の危機を回避させながら日本をうまく明治維新にすべり込ませたのは、ほんとうは幕府であり、優秀で誠実な幕吏たちだったんです。いま、そういう観点が必要ではないでしょうか。」(『日本にとっての“鏡”』『SAPIO』1996.6.12号)。

「むかしから官僚はえらかった」などと誤読されては台無しですが、歴史をうごかす転轍器を、外

発的な(多くは軍事的な)力に求めるか、内発的自生力 — それはどこから得られたのでしょうか、果たして武士道からか? — を重視してみるかの問題です。大きな変革は、双方の力の交差するところに成り立つものかもしれませんが、堀たち通詞も、「我日本洋学の先人」(福沢)として、巨大な近代的強力「文明」に脅かされながらも、それに触発されて内発的開国を準備し、それに貢献しえた人々であったと、見ていきたいのです。

そして、さきに引用した文に続く最後の一行で、森岡さんは書いています。「しかし、その日常語から縁遠い訳語は、日本人の生活や行動になかなか結びつかない」。これは、本講演の結びに予定している次節のポイントに他なりません。

8. 経験の抽象化としての思想 — 動詞から名詞へ —

中江兆民らは *Philosophy* の訳語として、中国の古典をもふまえた「窮理学」ないし「理学」を愛好して使っていましたが、いまではすっかり死語となって、なぜか西周の訳した意味内容の分からない「哲学」の方が生き残ってきました。西が政府に近い経歴だったからだという人もあり、明治 10 年、東大文学部「哲学」科の命名で決定的となりました。

かつて青雲の志を胸に秘めた青年たちは、田舎から大都会へ移り「下宿」 — これも死語になりましたネ — したのですが、古在由重さんは、かつて留学し下宿した英国なんかでは「この家の家主の *philosophy* はどんなものか」といった会話は、ごく自然なんだ。〈考え方〉とか〈生き方〉みたいな感じなんだと語っていたそうです。日本では人の名前くらいにしか使いようがないとも述べていますが、そういえば私の恩師も(和辻)哲郎とか(古川)哲史とかいう名をもつ人たち、のちに哲学者になった人たちでした。

Philosophy の元になった語は、古代ギリシャでは、大工が家を建て船頭が船を操る智慧・知識を意味したことば(動詞を伴う日常会話)でした。「あなたはフィロソフェインしながら観るために国々を歴遊して来られた」(ソロンへの言葉)も、「哲学しながら」ではなく、まず「見聞を広めながら」といった意味でした。まず生活用語として使われていた語を、その後、ヘラクレイトスやプラトンらによって、「愛智する人々」「智慧への渴望、智慧を求める激しい愛欲」といった特殊な意味に抽象化されていって、次第に名詞、学術語となっていく。これが言語の普通の歩みでしょう。したがってどんなに抽象化されたあとであっても、その底に具体的な生活経験が息づいているのが見え隠れしています。

ところが日本では、日常経験を経ずに最初からまず名詞として与えられます。近代語の多くが洋語の翻訳ですから、当然そうなります。そこが問題なのです。思想というものを、およそ《経験からの抽象過程》としては考えられなくなるからです。

さきに引用した長文の中身において、森岡さんはそこまで見届けて書いていました。

日常語として、学者ではなく普通の人々 (*common people*) の日々の生活経験や、そのダイナミックな過程を欠いて、いきなり既製品として — まえに述べたように、変化している現実、言葉の動きを止めて固定し、 — 抽象的な名詞(学術用語なども)が与えられる。学者社会だけの隠語になりやすいのも、そのためでしょう。水平なヨコ社会になりきれず、それなのに形だけはどんどん進歩していきますが、抽象的文化レベルだけでの交流、文化接触という悲喜劇を生んでいます。

たしかに、それも傾向としては歴史的に必然であったとしても、それがどれほど異常なことであつたか、その自覚は幕末いらい華々しい「文明」のまえにかき消されて今日を迎えています。

経験世界、日常生活における言葉、人々との(とくに間接でなく直接的な)交流、討論、深化を経ないで、ただ観念だけが暗記の対象として一人歩きする。こうなると、物事の本質にさかのぼって《考える》習慣、—「復初」の姿勢—、これこそが物事の根拠を問う精神、すなわち Philosophy なのですが、それを喪失しながら近代化してきたと云わざるをえなくなります。しかし、〈日本に哲学なし〉などと切り捨ててしまうのが講演の本意ではありません。何とかして《生活＝ことば＝思想》をつなぐ環をみつけて、ともに生きていきたいものです。私の話しもそれを希望してのことです。

腹の底から揺さぶられるような言葉を、たとい発信できなくとも、せめて受け止める感性を失いたくないものです。でも、私たちの環境は、依然としてまだ、心を揺さぶるのは「ことば」ではなくて、あいまいな「情」による伝達、じつは同意強制のようです。もちろん「情」は大切ですが、むき出しの情だけでは、かえって‘the same heart’にはなりにくいのではないのでしょうか。福沢は「現実の中に生きている日本語を用いて…その意味を変え、現実そのものを変えようとした」(柳父、前掲書)点で、偉大でした。今回は幕末明初の事例でお話しましたが、それを「昔の人は大変だったのだなァ」というふうには聞いてほしくないのです。いうまでもなく日本語通訳翻訳への日々新たな模索と参加は、過ぎさった過去のことではなく、現・未来にわたる課題であり続けるからです。内田義彦さん(経済学史研究者)の次のことばは、耳に痛いですね。

「専門語が学者用語として日本語の外にあり、その日本語でない専門語を安易に使うことによって、かえって日本語のなかに生まれるべきもの[＝思想]としての専門語をおしつぶしているということがないか」(内田義彦 1977)

これから始まる日本通訳翻訳学会大会のご盛会を祈りつつ、講演を終えます。

(2009.9.5 名古屋市・金城学院大学にて)

.....

【堀先生プロフィール】

1931 年生まれ。東京大学大学院博士課程修了。1961 年～1986 年 福島大学教員。1986 年～2002 年 名古屋学院大学教授。現在名古屋学院大学名誉教授。著書に、『近代の社会倫理想』(青木書店)、『英学と堀達之助』(雄松堂出版)、『日本における近代倫理の屈折』(未来社)などがある。

【引用および参考文献】

杉田玄白 (1774) 『解体新書』(安永 3) (講談社学術文庫 1998 現代語訳)

『諸厄利亜語林大成』(1814) (叙と題言)

杉田玄白 (1815) 『蘭学(又は蘭東)事始』文化 12 (講談社学術文庫 2000 全訳注)

ホークス(Hawks)編 (1856) 『ペリー艦隊 日本遠征記』第1巻、20 章 376 頁 栄光教育文化研究所 1987

堀達之助 (1862) 『英和对訳袖珍辞書』初版 複製 1973(惣郷正明解説)、原稿新発見 2007

- へボン (1867) 『和英語林集成』初版・慶応3年、再版 1872 明治5年、3版 1886 明治19年
柴田昌吉・子安峻(1873) 『英和字彙』初版 (明治6年)
久米邦武 (1878) 『米欧回覧実記』岩波文庫
西周・編 (1881/明治14) 『五国対照 兵語字書』参謀本部
福沢諭吉 (1897) 「福沢全集緒言」『福沢諭吉全集』第一巻;『福翁百話』62
和辻哲郎 (1929) 「日本語と哲学の問題」『続日本精神史研究』岩波書店
竹村寛 (1933) 『日本英学発達史』研究社(復刻・名著刊行会 1982)
岩崎克己 (1938) 『前野蘭化』(東洋文庫 1996 平凡社)
板沢武雄 (1954) 「阿蘭陀通詞の研究」『法政大学文学部紀要』I・史学(1)
丸山眞男 (1961) 『日本の思想』岩波新書
古田東朔 (1968) 「堀達之助と『英和对訳袖珍辞書』」『言語生活』197号 筑摩書房
森岡健二 (1969) 『近代語の成立』明治書院 1991
惣郷正明・解説 (1973) 『複製版・英和对訳袖珍辞書』初版翻刻 秀山社
町田俊昭 (1975) 「神奈川条約条文の誤訳の発生過程」『日本歴史』322号 3月号
内田義彦 (1977) 「アダム・スミス — 人文学と経済学 —」『著作集』8 岩波書店
ウィリアム・ルイス、村上直次郎編、富田虎男訳訂(1979, 1985) 補訂版 『マクドナルド「日本回想記」』
刀水書房
長谷川誠一 (1981) 「マクドナルドの第十一番目の生徒研究」『函館英学史研究』1986
柳父章 (1982) 『翻訳語成立事情』岩波新書
堀孝彦 (1983) 『近代の社会倫理思想』青木書店
吉村昭 (1986) 『海の祭礼』文藝春秋
茂住實男 (1989) 『洋語教授法史研究』学文社
吉村昭 (1991) 『黒船』(雑誌 1989-91) 中央公論社
加藤周一 (1991) 「明治初期の翻訳」『近代日本思想大系 15』岩波書店
網野善彦・鶴見俊輔 (1994) 『歴史の話』朝日新聞社
宮村治雄 (1996) 『開国経験の思想史』東京大学出版会
杉本つとむ (1999) 「英和对訳袖珍辞書の研究」『杉本つとむ著作選集 7・『辞書・事典の研究II』
八坂書房
町田俊昭 (2001) 『開国蟹文字文書論考』小川図書
堀 孝彦 (2001) 『英学と堀達之助』雄松堂出版
白川静 (2002) 『字書を作る』平凡社
三谷博 (2003) 『ペリー来航』吉川弘文館
安田敏朗 (2006) 『辞書の政治学—ことばの規範とはなにか—』平凡社
名雲純一(編輯)(2007) 『英和对訳袖珍辞書原稿影印』、序・堀孝彦 名雲書店
石川九楊 (2008) 『図説 中国文化百華、第1巻 漢字の文明・仮名の文明・文字からみた東アジア』
農山漁村文化協会
堀 孝彦 (2009) 「開国と対訳辞書」『名古屋学院大学論集・社会科学篇』46(1)
堀・三好彰編著(近刊)『解説「英和对訳袖珍辞書」原稿—初版および再版—』(港の人)